九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 慶長15年聞書 貞享3年書写 五逆秋(無門関抄)の国語学的研究（二） ： 序　指定辞の様式（その２）

春日，和男

https://doi.org/10.15017/2332770

出版情報：文學研究. 68, pp.1-20, 1971-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

慶長十五年聞書
貞享三年書写

# 五逆秋（無門関抄）の国語学的研究〔二〕

## ――序 指定辞の様式（その2）――

春日和男

### 五

すでに指定辞の様式について、ナリ、ナ、デアル、ヂヤ、ダ、デソウ、デゴザアルの七種類における実態を観察したが、このやうなさまざまな様式の混在については、本抄における文体の問題が関係してゐること論をまたない。それ故、ここでは、なほ残余の指定辞ゾおびョについて補説をなした後、本論篇に入り、本文の中で必要な個所を抄出して言語上の問題点に触れることにする。その際指定辞の混在する有様にも言及することにする。

さて、抄物の文体は、その指定辞、ゾとナリ（也）の用法によって、区別される傾向が強い。然し本抄の場合は、両者が混然としてやや識別困難な面もあるが、総じていへば、ダゾ（ㄖゾ）の造字が示すやうに、ゾ体であるといった方がよいであらう。それは後述の本文例についてみても明らかであって、漢文訓読的な文体から、口語的な文体に移行した際に、ゾ体となるのである。例へば

生得三座ト云ガ有ル。首座ト維那ト知客ト也。扨テ三座ハ三世也。又ハ州裡底ト県裡底ト物裡底ト是ハ則法報応ナリ。程ニ第三番目ハ応身化説ト見レバ夢ノ説ゾ。扨コソ小釈迦ト云ハ聞ヘゾ。（六二ウ　第二五、三座説法）

のやうにナリ（「也」字を含む）と、ダゾ（ゾ）が共存してゐるのである。つまり文体が雑然としてゐる為でもある。注釈文は、最初が漢文の直訳になり、更に別の注釈乃至譬喩をもって示す場合があって、例へば、

何ト云ヲウニ、サテコソ答ヘヌガマシダ。答タ郎ニハ鬚入道ヨ。程ニ古ノ明匠達ノ代句多シ。口上ハ着来テ無ニ咬処一方ニ知ル千聖不レ能レ伝フ。註ノ云口ヲヂット押テ物ヲモ云ハセヌ境界ヘハ千仏万祖モ及マイゾ。又憐テレ児ヲ不レ笑ニ他ノ醜一ヲ、註ノ云是ハ虎頭上座ナド用（やう）ナ人ヲ目カケタゾ。虎頭上座ト云テ香厳ノ主座ダ。（二〇オ　第五、香厳樹上）

のごとく、一般に「註シテ云」以下に口語的要素が強くなるのである。

さてみぎの文体の中でも、ゾが屢〻あらはれた。この指定辞は、連体形承接の場合、つまり、断定的用法が、絶対優勢であって、既にダゾ（ゾ）の型においても見て来た通りである。

猛キ物ガ一ツ有ルゾ。（一ウ）運ヲ開キ大利ヲ得ルゾ。（三ウ）此人ヲサヘギリ、住（とゞ）ムル「ハナルマイゾ。（三ウ）此馬ノ毛筋ノイクツ有ルマシテシレルゾ。（四オ）花巾ヨリ外ニ入ラヌゾ。（五オ）何事モ手アライゾ。（六ウ）

のごとく当初から用例が頻出するのであるが、これに対して、ゾの体言を承接して、指定辞となった所は極めて少なく、

スハ初音ゾト云ニマカセテ（五一ウ）古哥ニ夢ノ世ゾト（六三オ）此句ハイブカツタ代ゾ。（六四ウ）心動ジ

タ時ノ「ゾ。（七二ウ）

の四例ぐらゐである。

因みにゾは、指定辞ナリの発生に関与し、重大な影響を与へて来たものであることは、既に説いた所であったが、連体形を承接した終助詞的なゾは、一方において、言語主体の聴手に対する態度の表明として、見ることのできるものである。本抄にはナルゾという形がないが、次のやうな奇型が存する。

差過ニ常ニ三千里外フミチガヘタゾ也。（六五オ）

この「也」は恐らく逗点の代字と見るべきもので、不読であらうと思はれるが、珍しい例である。ゾがこのやうに頻出し、特にナリが連体形を承接した型、例へば前出の「此ノ上樹ノ話ヲ建立スル也」（一九ウ）のやうな例が僅少であるのと比べると、やはりこの抄の文体は、指定辞の様式が種々なるにもかかはらず、ゾ体を主流とするものであると見た方がよいであらう。

ゾの連体接続形が多くて、体言承接型が少ないのに対して、その逆を行くのがョの用法である。ョはもともと間投助詞であらうが、ゾと共に指定辞化し、ゾほど総数では多くないが、特色ある存在である。体言を承接した例は、

只箇（コ）ノ一関ノ事ョ。（八オ）悟真無契当ョ。（八オ）手ト手ヲ取テ同一眼ョ。（一三オ）堕シタモ一老人ョ。（一四オ）二三モ一串ョ。（一六ウ）代ツタリトモ皆迷情ョ。（一八オ）

のごとく、当初から頻繁にあらはれ、特に口語調の強い場所を占めてゐるのが特色である。

また比況の助動詞の「如ク」に対しては、ョが接続して

汐ヲ巻返シタ如クヨ。（八八ウ）、猶如ニ今日一ヨ。猶如レ今ヨ。…ト見タ。（一〇〇ウ）

のやうに、終止相当形に用ゐられたが、この場合「如クゾ」となる形はあらはれない。ゾが関与するのは、

ホコリ灰籔カケル如クダゾ。（一〇二ウ）

のごとくダを介するのが常である。また、「散々」といふ形容動詞語幹相当の形には、

又立返テハ散々ヨ。（八六オ）ムサト説イテハ散々ヨ。（七七ウ）

のごとくヨがついて、ゾはもちろん用ゐられない。

ヨが一般の活用語尾連体形を承接した例は、

坊主ガ二人リ出来タヨト喜ヂヤ程ニ（三六ウ）汝ガ否ヲ引導スルヨト被仰也。（五七オ）作者は急流デ金魚ヲ釣タハ任公モ申サウヨ。（八七ウ）壁観婆ヲ門モ助テタモウレデ有ラウヨ。（九四オ）ドコデモ威風ハ有ウヨ。（九五ウ）赤面シテ去ウヨ。（九六オ）

のやうに散見し、体言承接の場合よりは、少ないにせよ、ゾにおける体言承接の例が少なかったのとは比較にならず、しばしば見ることのできるものである。ただ全体としては、やはり用例がかなり局限され、特に推量のウに接続した形としてあらはれる傾向を持つ。

## 六

以上、ゾとヨの関係が、それぞれ特異性を発揮して、対照的であるから、以下に指定辞として見たゾとヨの両者を二、三比較しておかうと思ふ。最初に他の指定辞との接続関係を考慮に入れると、ゾは連体形の承接力が旺

盛であるから、他の指定辞を連体形にして承接することがある。ダゾ（畝）はその著しい例であるが、

出ルモ入ルモ月日ヒトリヂヤゾ。（九二ウ）驀当下ガ見事ナゾ。（六四オ）某ニ何ノ返ガ御座有ルゾ。（四二オ）

接シカケテ御座有ルゾ。（八二ウ）

のごとくあらはれる。但し「見事ナゾ」は形容動詞承接と見られるものである。ョは

目鼻ガ落テ御座走ョ。（六九ウ）

とあって「サフラフ」の変化した連体形「サフ（ソフ）」（走）にのみ見られる。従って、ゾとョの重なりでは、

秋菊春蘭各時ヲ知タハ明ニトシタゾョ。（一〇四ウ）

のごとく、ゾョの形をとって稀にあらはれる。

次に接続助詞「程ニ」に接続する形は、

無疑ノ事也程ニ（五八ウ）合頭ノ脱躰底ノヲ人ナ程ニ（八三ウ）為人ヂヤ程ニ（五二ウ）亭主モ天分ニ出合フ物ダ程ニ（八二ウ）貧ナ者程乞ドモタマラヌ物デ走程ニ（三一オ）主人公ヲ誘イ出シテ御座有ル程ニ（九九ウ）

のごとく、「デ有ル」以外には用例が多い。

「ゾ程ニ」の接続形も、

ョツト云テ成タガ人デハ無イ主人公畝、程ニ（一一オ）三返回リ指ヲ鳴セドモ眠リ笑ヌゾ、程ニ（九一ウ）取チガヘタラバ薬チガイガシテワルイゾ、程ニ（六四オ）鬚赤ノ利振者ヂヤト讃タゾ、程ニ（一三オ）

のごとく用例が多い。「ョ程ニ」は、これほどまで目立たないが、なほ、

口ガ無イ人ダ程ニ鬚ヨ、程ニ（一七ウ）千里万里ヨ、程ニ（九オ）答タ郎ニハ鬚ヨ、程ニ（二〇オ）角ノ無イ目ノ冂ヨ、程ニ（二五オ）

のごとく、体言を承接したヨには例が多い。

露穴が点頭申シ走ヨ、程ニ（八三オ）頭ゝ物ゝ我デアラウヨ、程ニ（四六オ）

は、用例の少ないものであるが、「走ヨ」の例が既にあり、またヨが推量のウに接続することがある以上、別に無理な形ではない。但し、「程ニ」の接続が連体形からくるものか、または終止形（文の断止）からくるものかは文脈によるが、多少曖昧である。[註1] ともあれ、「程ニ」への接続は、助詞の指定辞ゾとヨが相伯仲してゐるのが実状である。

次に注意すべきは、係助詞コソとの結びである。元来本抄におけるコソの結びは、かなり混乱してゐて、それも当然といへることであるが、例へば、

サテコソ尽大地ノ情非共ニ得入デハ無イカ。（一ウ）世尊コソ問イ申シアラウガ、（五六ウ）敵カトコソ思テアレバ不二味方打ハセラレマイ。（六九ウ）

のごとく、極めて雑多な結びの形式を持つ。然し一方では、

裏ヲコソ沙汰シテアレ。（一一ウ）早ク取テコソハ向フナレ。（四三ウ）或ハ法相宗ノ事デコソ有レ。（六六ウ）

のごとく、係りと結びの間が接近した熟語的な形の中には、面影を留めたものが見られる。ところで、このやうなコソの結びの雑多な中で、ゾとヨはその結びとしても関与してゐる傾向を持つ。

時コソ相送リヤウ無門ダゾ。（五オ）古ヘコソ何ニトモ御定次第次第ト云テ承当テ願タゾ。（四八オ）落チタ物

コソ絵ニモ書キ賛ヲモスレゾ。（六〇ウ）謝シ（タ）郎コソ有ル角モ無イダゾ。（九五オ）

このやうな例は他にも多い。つまり、コソは単なる強めの用法としてのみ用ゐられたものである。

ソレコソ真実ノ神仙ヨ。（二九オ）手ヲ開イテ故下シテコソ富ミノ寝所ヨ。（六五ウ）サテコソ堕落一致ヨ。（九二オ）コウ有テコソ達磨宗ハ建立ヨ。（一〇三オ）

は、ヨの結びとなった例の一部であり、徒然草にも、すでに「われこそ山だちよ」（八七段）とあったことなどが思ひ出されるのであるが、「コソ…ヨ」の形は、既に院政初期から存在してゐて「そのとどまりおはします女院こそ大斎院よ。」（大鏡上）「其女コソハ汝ガ家ノ屎尿ノ穢レ浄ツル女ヨ。」（今昔三ノ二一）のごとき用例が指摘されてゐる。[註2]

要するに、間投助詞的なゾとヨが指定辞としての用法に変って、互に相似した形式の上に立ちながら、しかもゾはいはゆる断定辞として、ヨはいはゆる指定辞としての用法に傾きつつあり、この様相は、近代における、ゾとヨの用法への一過渡的状況を示すものと考へられる。あるいは、指定辞としてのヨの用法が関東的な色合ひを出したものとも解されないことはない。指定辞は畢竟、客体的には文内容たる判断文の断定乃至措定に関する性格を有し、主体的には理解者側にある聴手への姿勢を示す性格を有する。この二面性は、わが国語における指定表現の重要な特色であって、それは曽て上古において助動詞ナリ（終止形）がゾと交替し得た時より持たされた宿命でもあった。「ゴサアル、ゴサ走」等が近世初頭において指定辞として同じ二面を有するのも、あながち偶然でないやうに思はれる。

註1　「是ハ則法報応ナリ程ニ」（六二ウ）によれば終止形である。

2　山田巌氏「院政時代の説法」（岐阜大学研究報告二号一四ページ）

## ――本文抄出（その1）――

### 一

既説のごとく、本抄に指定辞の種類が、非常に多く見られることは、雑多な文体の混入が予想される。よって、以下に本抄の本文を抄出し、その文体を吟味し、然る後に一般国語史の事象に言及しようと思ふが、まづ冒頭の部分、即ち序から始めて、特に無門関の原文と対照できるやうにして提示して見る。なほ、抄出にあたっては、漢字および仮名の送り方、漢文的な返点、特殊な仮名字体等は、なるべくそのままに飜出し、漢字の音訓について、片仮名表記のものは、原文に付せられたままのもの、平仮名表記のものは、筆者が特に推定して付したものであることを予めお断りしておく。

説道無門　尽大地人得入。説道有門、無阿師分。第一強添幾箇注脚、大似笠上頂笠。硬要習翁贊揚、又是乾竹絞汁、著得這些嘍本、不消習翁一擲一擲。莫教一滴落江湖、千里烏騅追不得。

紹定改元七月晦　習庵陳塤遇

説道無門盡大地人得入　代云八万四千法門八字折聞了也。註ノ云、八字トハ人毎ノ上ニ有ル眉毛ノ事也。八万ノ法藏ハ有情ノ上ニアル青黄赤白長短方円、是ヲ亮率和尚ハ上人ト云ㄇ。ナゼニナレバ人ノ上ニ居ル程ニサテコソ尽大地ノ情非共ニ得入デハ無イカ。説〇注脚先ヅ阿ハ高遠ノ徳有ルニ付ケル字ナリ。爰デハ恵開ノ事也。恵開及ビ一千七百人ニ至迄第一ノ無門ヲ有無ト云タ人ハ無イゾ、程ニ是ハ有門ヒ無門ヒ云ヘ句ハ付ラレヌヲ強テ此デ四十

八則及一千七百則　ノ註却笠ハ〇笠ハ　言ノ糖(アマカス)ト。況ヤ此習翁儒者ナドガ硬ク存モ寄ラヌニ恵開ノ這千ノ古則デ讃掲セヨト仰ラルレモ少モ湿(うる)イ有ル物ニハ取付易イガ恵開ノ境界ハ乾竹ヲ炎天ニ百人サラシタ如クヂヤ程ニ我等ヅレガ助言申シタロウニハ汁塩曽ラ付ト。這ハ竹也。愛デチト心得ベシ。哮本ハ普燈ノ録ニ如レ有ルガ虎之彪返(ホンケイ)ニ睨ノ其母ヲ不レ守ニ窟宅ヲ一哮吼吒沙(ダサ)ス。註メ云虎子ノ中ニ彪(ヒヤウ)ト云猛キ物ガ一ツ有ルゾ。母其彪ヲ舐リソダテントスレバ猛キ物(ニオ)ヂヤ程ニ、クワツト哮ヘテ沙ヲツカミ、大ホコリヲ立テ母ヲケカヘシテ其屈宅ヅレヲ守ラズシテ卓爾ト彪ノ家ヲ立ルゾ。恵開ノ祖仏ヲ耀倒シテ卓爾トメ余ニ混セズ至聖歴祝ヲモ吒クワツト哮出シテ、御座有ル。四十八則ノ批判本ヲ着得(アラハス)スレバ、習翁ナドガ筆舐リテ一筆摸(ウツ)付テモ消(モナイ)ベキ本デ無イ程ニ指(さし)ヲケバ、只ト仰ラル丶程ニ又一筆摸付テモ見ントスル一滴ヲ江西湖南ニ落シテ諸人ニ嘲哢セラレウズル其ノ恥ハ項羽ガ乗タ早馬デ取返サントシテモ取返サレマイ程ニト終(つ)ヒニ此序ヲ書キヌト序シタハ手柄ナ序ダ。向(ヒ)フハ何レノ註モ云イ立テ得マイゾ。習翁ハ道号陳塤ハ諱也。上ニ絞レ汁(を)トアルヲ受テ一滴ト響シ ト。

句読点および濁点は原文になきも、筆者の推定により適宜付した。なほ、語句の見出しに「説〇注脚」「笠〇笠」(それぞれ一ウ)と見えるのは、本文の文字面と対照した場合、明らかであるやうに「〇」によって中に充当すべき文字を省略してある。例へば、「説〇注脚」は本文に従って、説道無門　尽大地人得入。説道有門、無阿師分、第一強添幾箇注脚」の全文であるし、「笠〇笠」は、「笠上頂笠」であることになる。以下同様に解するものとする。

表　文

紹定二年正月初五日、恭遇天基聖節。臣僧慧開　預於元年十二月初五日、印行拈提仏祖機縁四十八則、祝延今上皇帝　聖躬

万歳万歳万万歳。皇帝陛下　恭願聖明斉日月、叡算等乾坤、八方歌有道之君、四海楽無為之化。

慈懿皇后功徳報国佑慈禅寺前住持伝法臣僧慧開謹言。

然而恵開紹定○節天基トハ三才ノ時王ハ人才ノ基ィ也。聖節ハ正月ハ五節供ノ初、無道悪王(ニウ)ニ非ズ、聖王ナル故ニ聖節ト云。又論語ニ節ノレ用ヲ而愛レ人ヲ使レ民以レ時。臣僧トハ一モ王ヘノ進上ニハ臣僧ト書ク也。印行トハ判木ノ丁モアリ、可ノ丁モアリ、判木ヲ起シタ丁ト云テ吉(よい)ソウナ。聖躬ハ御身命ノ丁、陛下ハ或ハ床下足下幕下也。聖明ハ国ヲ収ノ家ヲ有(たもつ)テ民ヲ憐ミ、六宮ヲ哀愍シ君徳明ナル丁日月ニ斉シキ也。叡ハ聖王ノ昔日ニ天ヨリ降(くだつ)タ字也。依レ之王ノ沙汰ヲ申スニ将軍家ニ御ノ字ヲ用ル如ク王ヲ叡安叡感叡覧ナド用ル也。算ハコトブキト読テ寿命乾坤ノ始終無ィ如クニ長命ト祝シ町ノ程ニ、王ニ父母無シト云テ父母ノ沙汰ヲスルハ殊ノ外物知ラズヂヤ。八方○君　天下デ至徳ノ明君ト唱ル。四海○化トハ百官万民五労七傷ノ病不レ起瘧鬼ヲ防ギ国々蜂起無ク、安全ナリト祝ス。慈懿ハ后キノ名、今ハ山号ニ用ユ。祐(三オ)

(佑)慈ハ后キノ母ノ道号、即　号ニ用ル也。

## 自　序

禅宗無門関

仏語心為宗　無門為法門。既是無門　且作麽生透　豈不見道　従門入者不足家珍。従縁得者始終成壞。恁麽説話　大似無風起浪好肉剜瘡。何況滞言句　寛解会　掉棒打月隔靴爬痒　有甚交渉。慧開紹定戊子夏　首衆于東嘉竜翔。因衲子請益　遂将古人公案　作敲門瓦子　随機引導学者。竟爾抄録、不覚成集。初不以前後叙列　共成四十八則通曰無門関。若是箇漢　不顧危亡　単刀直入。八臂那吒、攔他不住。縦使西天四七　東土二三　只得望風乞命。設或躊躇　也似隔窓看馬騎、眨得眼来　早已蹉過。

頌曰　大道無門　千差有路　透得此関　乾坤独歩

禅宗無門関是ハ筆受弥衍宗ガ序

佛語○門是ハ花厳経ノ文ヲ承テ発端ニ置ィ叫。経ニ云観通世間一切法門無　能入法界一心之宗不堕断常之見矣、只末世ノ比丘恐クハ唯心ニ親シ錯テ断常ノ見ニ落ルコヲ。既是○透トハ兜率ノ上人ヨ。是ヲ何ト　ラン〳〵ト請カケテ古語ヲ引テ　従門○壊　人〻ノ上人ナレバ門縁ハイラヌゾ程ニ、恁麼○話　鸚鵡返ニツ、カヘシタモ大似○瘡　七死ヲ鑿開シタ「ヨ。何況○交渉トハ河ムカイノ火事依テツカヌト云「也。東嘉ハ処ノ名、龍朔ハ其夏ノ首座ノ名或処ニ寺号ト云可レ考。衲子ハ了事ノ衲子ニ非ズ、百家デ乞イ集テ衣トスルヲ云也。請益ハ乾峰一路ノ下ノ如シ。遂○子トハ「一三ウ代蔵経モ一千七百則モ無門ニ契当スレバホト〳〵ト打瓦子叫。随○者トハ臨済ニハ三玄ト立テ曹洞ニハ三位ト立テ衆機ヲ別叫。竟尒トハ遂也。抄録○関トハ此ノ四十八則ハ生起次第ニ兆ス、浅源次第ニ兆ス、源浅次第ニ兆ス。口ニ出ルマヽヒツ書キ出シテアレバ無門巻ト云録一巻ト成叫。若是○直入トハ兵法ニ大事ガ有ルゾ。我カ身ヲ助リ敵ヲ打ント思ハ悪シ。本ヨリ我身ヲ死ント思フモ、血気ノ勇士ト云テ悪シ。只進則（すすひとき）ンバ安楽世界、退則（しりぞく）ンバ八万地獄ト心得テ是非ヲ不レ願、木刀竹刀ナリモ、末向ニヒツカツイデ、ツヽト入レバ、運ヲ開キ大利ヲ得ルゾ。此ノ境界衆ノ人ガツヽト入ラバ那吒トハ毘沙門　来三面大臂ナレモ、縦ヒ百面千臂ナリモ、此人ヲサヘギリ住（とと）ムルコトハナルマイゾ。望風トハ論語ニ云君子ノ法ハ風ナリ小人ハ草ナリ々加（四オ）レバレ風ヲ必ズ偃（ノベフス）如ク天下ヲ収メ君子ト成タ郎ニハ佛ニ逢テ佛ヲ殺シ、祖ニ逢テ祖ヲ殺ス程ニ此威風ニ寄セ合セタ郎ニハ祖佛モ命ヲ乞テ御助有テ給ハレテ有ロウ。躊着（チウシヤクハタチモトラル）（躊也）佛祖ヲ礼テ御機嫌取ガマシウスルツレハ、似○過ト云テ眈ヲ巻キ上ケテ簾細ニ見ントスレバ、スイト騎リ通シタゾト云モチクトシタ小窓デ見ル故ヘダ。戸垣ヲ打破シ屏風障子ヲヲツ取ノケテ見レバ此馬ノ毛筋ノイクツ有ルマデシレルゾ。蹉過ハ常ニ三千里外フミチガヘタゾ也。隔窓○騎トハ風前ノ白馬ト云テチロリト見ヘテ見ヘヌヲ云也。チ

ロリト云ナゾデミミズトトイタゾ。頌ニ大〇門　武蔵野ニ入ニ昔モ今モ門立タ人ハナイ。千〇路八方ニフミアゲテカケサワリハナイ。又武蔵野ニスマイスル入道ガ哥ニ武蔵野ニヲルベイ花ハエウアレド露ユツポ（ケ）レバヲラレザリケリ、向フ詠ダヨリ見レバ天神人丸ノ詠ジテハ足カヽリガ有ルゾ。透〇関ヤレ八方ヘ透通セヨ。乾〇歩彼入道ガ一足ニ立テ花ヲル足モトヲ古人ガ乾坤大地足解脱ノ門ト云。又ハ乾坤大地無第二人ヨリ透通ゾ。見ヨフタツトハアルマイゾ。

## 二

以下本文、まづ無門関註却と題して、無門の義から入ってその前文とする。

### 参学比丘弥衍宗紹編并筆

無門関註却

先題号ニ禅トハ空劫以前ノ大禅也。如何是大禅御代ニ蘋抹風息テ露光冷カ。註メ云ヒント云草ノ花ハ沼ニ梅ノ花ナドノ如ニ白ク水ニ浮テサク花也。此花波風サワガシク無キ時分ニ露ヲタンブト含テ月光モ朗々ト宿テ、イカニモシヅ〳〵トシタ底ガ大禅ナリ。此境界ニスリツケレバ煩悩ノ率風モ吹サワガヌ物也。寒ヲムネトスル故ニ禅宗ト云。無門ヲ代云白沙翠竹江村ノ暮柴門相送テ月色新ナリ註メ云上ノ句ニ用所無シ。下ノ句ノ柴門ト云ハ我等カ方寸ノ六門ノ事也。相送ト云ハ扨、此事ハ何ト〳〵首ヲヲサヘ胸ヲ叩テ眼ヲ閉、耳ヲ傾ケ二六時中提撕メ茶飯寒熱ヲモ忘却メ、六寸ノ境界ヲカラリカントカラ籠ニナシタ時ソコ相送リヤウ無門ゾ。畢竟無生ノ口ヨ。月色新トハ此心月古跡旧住ノ着カ無イ程ニ新ト云也。此ノ境界ニナルニ千差ノ路有レモ雖レ透サテコソ関トハ云也。惣ノ此四十八則ハ無門関ト参

ル也、程ニ今宴デ無門関ノ三字ニサヘ契当シタ郎ニハ四十八則ハ不レ及レ云ニ類事碧岩伝灯一千七百則モ花巾ヨリ外ニ入ラヌゾ。此代句ニ雑談アリ。上野ノ国赤城山麓ニ猟者有リ屠沽ノ下類ニメ重罪ノ者タリ。死ルニ其ノ比禅僧ノ大見地ノ僧山居有シヨ導師ニ頼ム。無ニ異義一来テ弔ィ玉フ。其ノ晩ニ処ノ景気ヲ見ルニ、江ニ白沙ミチ〳〵テ青竹ナドモ村〻ニサモ面白イ暮レ方ナレバ取合セテ下炬ノ云白沙〇新矣、此一句迄テ即帰山ス。時ニ三村ノ道光ト云者アリ。心ロ有ル者ヂヤ程ニ、聴ニ聞ノ之ヲ一サテモ殊勝ナリト思イ、此由ヲ尋バヤト思イ、山ニ登リ、様〻尋ケルニ、サモ浅間敷柴ノ廬有。押開テ窺申ニソコニヨレテサレ頭ノ有ニ、ウス茶一服カスメテ出サレケリ。道光イタヾイテスツキト呑デ後、昨晩下炬ノ一句ヲ御示候ヘト乞タレバ、彼ガ言中、未レ叶者トヤ聞カレケン、三年過テ可レ被レ参由云含メテ門送シテ返サレケリ。如レ其ノ三年過テ彼ノ山ニ上テ見レバ、柴ノ庵モ破壊ノ住処カトヲボシクテ、岩間ニサレタル人形アリ。是カトサシ寄リ、見ントスレバ、ガラ〳〵トクヅレケリ。道光此時此句ニ依テ大悟ス云々。柴門ノ送リヤウハ是カ至極ㄇ。扨趙州無ヲ第一ニ至タニ習アリ。恵開比丘ハ楊岐派ノ尊者也。五家七宗ノ時、臨済ヨリ楊岐黄竜ノ二家ヲ開ク。依レ之ニ参禅ノカヽリ臨済ニ似タリ。時ニ楊岐第七世ノ師ニ弟子恵開ニ趙州ノ無ヲ示ス。恵開是ヲ参禅スル「六年ノ間飢寒ヲ不レ見。提撕スル「無レノ際純熟ス、故ニ宴ノ雑毒ヲカラリトマケ出ノ内外モ無レバスキトヲル程ノ時分ニ、斉皷ヲカラ〳〵ト打ヲ聞テ大悟スル「、点レバレ灯ヲ内外紅ト云カ如ク、皷声ヲ聞ケバ皷声ニ打成テ合頭直下ノ活句ニ云、白日青天一声ノ雷大地群生眼豁開万像森羅斉ク稽首ス須弥踍跳ノ舞フニ三台一然ルニ明日師ニ至テ将ニレ宣ントニ所悟ヲ一、方丈ニ参ルニ師即見(テ)レ之ヲ曰〻見神見鬼了也ト云アレモ、探竿ノ一喝ス。又無門モ一喝ス。喝声虚ナルヲ聞テ即許ス。因テレ茲ニ楊岐第八世ノ孫恵開比丘ト云。趙州無ニ依テ覧ル故ニ第一ニ置ク趙州無ハ最初古則也。此無デ覧タ人ナル故ニ何事モ手アライゾ。縦中カ高上古則ナ郎モ無門ノ乞カクル時ハ一

カヽリニ手アライジ。

第一　趙州狗子

趙州和尚　因僧問　狗子還有仏性也無。州云無。

無門曰、参禅須透祖師関　妙悟要窮心路絶。祖関不透　心路不絶、尽是依草附木精霊。且道　如何是祖師関。只者一箇無字乃宗門一関也。遂目之曰禅宗無門関。透得過者、非但親見趙州、便可与歴代祖師　把手共行、眉毛厮結　同一眼見　同一耳聞　豈不慶快。莫有要透関底麼。将三百六十骨節、八万四千毛竅　通身起箇疑団　参箇無字　昼夜提撕。莫作虚無会、莫作無会。如呑了箇熱鉄丸相似、吐又吐不出、蕩尽従前悪知悪覚、久久純熟　自然内外打成一片、如唖子得夢　只許自知。驀然打発　驚天動地　如奪得関将軍大刀入手、逢仏殺仏　逢祖殺祖　於生死岸頭　得大自在　向六道四生中遊戯三昧。且作麽生提撕。尽平生気力挙箇無字。若不間断　好似法燭一点便著。

頌　曰

狗子仏性　全提正令

纔涉有無　喪身失命

趙州狗子　趙州ハ国ノ名、諗禅師ト云也。江西派ノ人也。江西八十余、口中ニハ馬祖百丈、南泉趙州ハ麁形ノ翁老師ト申ノ安カラヌ明匠也。因トハ世尊ノ見、星霊雲ノ見、桃花香発ノ撃竹ノ如ンバ明星桃花、竹ニ瓦ノ当ルニ因テ悟道シタゾ。因縁ノ因トハ不レ可レ得レ定、為(七オ)ルレ上人ニ物ヲ申上ルニハ因ガワルウテハ申シカナヘラレヌ物也。論語ニ云、子曰侍ルニ君子ニ有ニ三ノ愆(アヤマリ)一。言未ルレ及言ヲ謂ニ之ヲ躁ト一言及ベモ不レ言、謂ニ之ヲ隠ト一未レ見ニ顔色ヲ言謂ニ之ヲ瞽ト矣、註ノ云君子ハ参リ物ヲ尋申ニ悪シクスレハ三ノアヤマチ有リ。一ニハ次デモ無クヒョツト云イ出ス是ヲ躁ト云。躁トハシヅカニ無イ口也。二ニハ言イ出ノ能キ時ニ不ニ言イ出サ一之ヲ隠ト云。隠トハ我カ問タイ実義ヲ不レ尽　事也。三

ハ目色心ヲ不レ知御機嫌不レ知申上ル「之ヲ云レ瞽トハ。　目クラノ事也。　此ノ僧モ趙州ニ物ヲ問フ程ノ物デヤ程ニ能ィ因ニ問ヲツロウ。僧問○也無、先還テトハ此僧モ悉有仏性ヲハ能ク心得テアレモ知テ問ハ礼義也。大□□底ノ人ニコソ仏性ハ有ロウニ還テアノ狗子ニモ仏性有ヤト問フ処ヲ蠢ニ群生ノ仏性ノ道一句ニ問ヒ。　アレバ州モ大息ヲツキ到頭シ眼ヲ閉テ大口ヲ開テ一期ノ勢ヲ尽メ躍騰テ無ト答ヒ。　去ル程ニ古人此無ニ八種ノ嫌路ヲ立テ何タル英君高賓ニモ息モツカセヌゾ。云トスレバ腮欠、思慮スレバ肝腹カ燃ル程ニコソ作者アリ。　毒炮吐レ気猛虎渉ルレ道ニ徹壁々々趙州之無、扨々何ト透ラン〳〵此ノ真無ハ上ニハ雲漢、下ニハ黄泉ニ徹メ辺際無レバ　至聖歴祖モ透リ過ギタ「ハ無イゾ程ニ、円応和尚モ何ト透ン〳〵ト逼懸テ千古ノ時匠連ノ代リ句ヲ出シヒ。全ク無ニ的位ニ欠クニ承当ヲ一註ノ云矢坪ガ無ィ程ニ何ト射ヨウニ。　又水銀ニ無レ瑕阿嶽無レ真　註ノ云、水ガネト云物ハキレモキレモキズガ無イ物ダ。阿嶽トハユリノ事也。　ユリニハ実ガ有ルモ無イモ有無ニ落ヌ物也。割テ見ヨ、砕イテ見ヨ、真無カ無イガ真ダゾ。又黄源頭ヨリ渇了註ノ云水上ヨリ清濁分ツテ一道ニ流ルヲバ一河トヤ云ン、二河トヤ云ント也。又満々挽テレ弓ヲ射不着、張張揮テレ剣ヲ斬ルニ無レ痕註ノ云何タル釈迦達磨モ此真無ニハ何ト射付ウ、何ト斬付ウニ、右ノ代何レモ此ノ無ニ渉ラヌ何モ当ヌト計也。　御私代ニ雲眠テ幽石ニ一塵根静ナリ。　月落テニ寒潭ニ一心境空ス。　註ノ云八種嫌路ヲ押立テイヤ〳〵ト計被タレ仰程ニ何ト〳〵ノ当頭ニ迷ノ雲モ此石室ニ眠リ納メテアレバ、真如ノ月モ寒潭ニ落テ心ニカヽル山ノ端モ無イゾ。所詮寔ヲカラリカントカラ船ニスルガ肝要ダ。　我ハ只有無ヲ離ン「ヲ要ンヨリ願テモ心路ヲ絶ノ空船ニ載テレ月ヲ帰ル。向ウ空船ニサヘナレバ心月朗々トノ沙界ヲ照ゾ。無門ノ批判ニ参禅○関　只今ノ一関ノ事ヨ。妙語トハ何時モ言語道断、心行所滅ト云テ言慮ノ及バヌヲ妙ト云程ニ、真実ニ能ク悟レバ妙語ヒ。　窮心トハ利根川ノ水上ヲ窮メ〳〵テアレバ葎ノ雫、萩ノ下露ヒ。其ノ葎ヲ終却メ見ヨ、利根川ノ路ハ終ヘヨウゾ。所詮心路トハ六門ノ路ヨリ

六塵ノ境ニ迷ヲ云ㄓ。此路ヤリヲサヘ終却スレバ、ソコガ其ノ儘妙語真無契当ヨ。向フ無ケレバ祖関〇精霊亡魂霊鬼ト成テ木草ニ取付テヤスミ、人ニ取付テ休ントスル故ニフケヲコリ疫病ナドヲヤマスルツレノ亡僧ニ成ルゾ。一義ニ云真無ヲ云ヘ〳〵ト云ハレテ桜梅桃李尾花槿ナドデ説話スルヅレノ僧ㄓ。向ハ有レモ且〇関ト拶シ上テ只此ノ一ケノ無ノ字ヨト代ㄓ。此宗門ノ一関ト云此ヲ無門関ト名ㄓ。透〇耳聞トハ達者有テ此真無ニサヘ合頭シタ郎ニハ天地同根万物一躰ノ故ニ歴代ノ祖師ト別肉デハ有マイゾ。寂ヲ至到無レ隔荷葉雨モ云君臣合頭モ云。刀斧切ルニ不レ開ト云ㄓ。扨コソ慶快是程ノ喜ハ有マイゾ。関ヲ透ント要スル底ノ無キハ恨ㄓ。将三〇疑団トハ只尋常ノ皮肉アツライ辛労デハ成マイゾ。三百六十ノ骨節八万四千ノ毫窮ガ一味ニトロケ合テムツリヤリト煙ノ出ル程ニ此ノ無ノ字ヲ疑団セヨ。此ノ疑ガ無ンバ真無ニハ千里万里ヨ。程ニ古人モ大疑ノ下ニ大悟有ト云ㄓ。此レガ此ノ無ノ字ニ参ショウㄓ。昼夜〇会トハ常ニ辛労ノ有無ニ渉ルナト接シㄓ。向フサヘ有ロウニハ如呑〇吐出トハ云ハリヤウ物デ有テコソ、吐出サレウ物デ有テコソ、若シ吐出シタ郎僧ハ本ノ物ハ呑マヌ蝿ガナ喰フㄓ。蕩尽〇悪覚トハ此ノ熱鉄ヲ呑了シタ郎ニハ従来ノ江西湖南デ仏味法味ヲ喰イコンダ悪水モ可シニ蕩尽ス。蕩尽トハ大萌ノ貞ナリ。是迄ハ竹箆ヲ驀面ニ持カケテ、通身ニ疑団ヲ起シテ、此ノ無ノ字ヲ只今云ヘ〳〵ト接シカケタガ、無門ノ思召ニイヤ〳〵是ハ霊利ノ聰敏コソ叶ウズレト久々〇一片、人ヲ三等ニ接スルハ智者ノ習デヤ程ニ持、カケタ竹箆ヲ取直シテ只ユル〳〵ト中下ノ機ニ与ヘテ自然ニ純熟ノ生仏一片ナラズ、唖子ノ夢ヲ得ルガ如ク只己ガ心内明メタ如デアラウゾ。驀然〇地向フサヘアロウニハ天ガ地ニ成リ、地ガ天ニ成ル時節アロウズト云ハ、天地ヲ手裏ニ握ルベイト也。如奪〇祖　蜀ノ国ノ臣下関宇ト云名将有リ。隣国ト戦フ時無刀デ走リ入ル彼国主ノ大刀ヲ奪取テ殺レ之ヲ。左ノ如智剣ヲ打捨テ、打成一片ナラバ尺迦モ達磨モユルセ〳〵デ有ウゾ程ニ、生死〇

昧、イヅクニ有テモ遊山デ走程ニ、且〇撕セント拶上ゲテ代テ云尽ノニ平生ノ気力ヲ一挙セヨニ此ノ無ノ字ヲ」ト也。此這ハ霊山少林ノ解会□□ヲ尽セバソレガ此ノ無ノ字ゾ。アレモ、若不〇着　油断シテハ成走マイ。常々ホグチナドノ能乾キ切タ程火ガチヤクト付ゾ程ニ、久々間断無ク寥ノヨクカワイタ程、喫茶喫飯ノ上デモ喫当ショウゾ。頌ニ正合トハ収メレ国ヲ有ッレ家ヲ事ダ程ニ、狗子〇令狗子仏性ハ全ク持チ全収メゾ。アレモ、纔ニモ渉ニ有無ニ一〇命有無ノ会ヲ犯サバ串ニサシ、火アブリニナラウ。此上頌本則解読ノ円応和尚説破ニ云　無門和尚ハ関守リニ似合ヌ。人モ透ラヌ関ノ戸ヲ透レ〳〵トハ御情無イ作尤ハ狗子〇令　安全ノ御世ニ関ハ走マイ。乍去纔〇命　大事デ走。

## 三

以上、当初の部分の抄出によって、観察すべきことを左に列挙すれば、まづ特殊な表記用の文字が注目される。

「ゾ」は、既に述べたところであるが、特に用例が多く、表記上の、ひいては文体上の特色をなすものである。もとより、「スイト騎リ長ジタゾ（四オ）・真無ガ無イガ真ダゾ（七ウ）」のごとき、仮名表記もあるが、「ゾ」の用字が圧倒的に多い。いはゆる指定辞（指定・断定）としてダゾに用ゐた

糖（アマカス）ゾ（二ウ）　此ノ無ノ字ゾ（一〇オ）

のごとき例と、いはゆる完了の助動詞（連体形）と接続した

響カシゾ（二オ、平仮名は補読字以下同じ）　祝シゾ程ニ（二ウ）

のごときタゾに用ゐた例の両様を見る。「モ」も用例が多く

有門モ無門モ言フ句（一ウ）

のごとき指定的用法の助詞と

縦ひ中が高上古則ナ郎モ（六ウ）

のごとき、活用言の終止形を承接した仮定的用法の、いづれもトモと読むべきものと、

三面六臂ナレモ（三ウ）　千差ノ路有レモ（五オ）

の已然形承接のドモと読むべきものの二種類がある。

「テ」は「モ」に比して用例は僅少で、抄出中には「窺ひ申すニソコニヨレテサレ頭ノ有ニ」（五ウ）の一例が見られる。なほ「キ」は漢字の「時」字を用ゐて、用例がない。その他、「ノ」（シテ）・「丶」（コト）は共に用例が多く、「丶」は「事」字より優勢である。畳字符としての「丶」と「〳〵」は頻用されることいふまでもない。

漢字の特殊な用法としては、

「郎」を推量助動詞の接続形ラウ（ロウ）　に当てて

契当シタ郎ニハ（五オ）　若シ吐出シタ郎僧（九オ）

に用ゐるが（主として連体形）、一方では

明メタ如クデアラウゾ …　向サヘアロウニハ天ガ地ニ成リ、地ガ天ニ成ル時節アロウズト云ふハ …（九ウ）

のごときラウ、ロウの表記も見られる。

「向」は、代名詞的副詞として、カウ（コウ）　に当てる。

向フ詠ンダヨリ見レバ（四ウ）　向フハ何レノ注モ云イ立テ得マイゾ。（二オ）

のごとく用ゐるが、「郎・向」ともに宕摂で、唐韻および漾韻に属するから、ラウ、カウを本来として合致するが、既に見たやうにロウの表記もあり、開合に関する問題点となる。

「則」は、漢籍訓読のトキンバ（トキニハ）に相とし、鎌倉期ごろから訓が固定してくるが、[註1] その用例に接する。

只進む則ンバ安楽世界、退く則ンバ八方地獄。（三ウ）

のごとく散見する。

次に文体についていへば、前述の通り、「代句」を引用して「註文」を付けるのが常例で、いはゆる「註メ云」以下が、稍くだけた文体となり、中には漢文の引用がそのまま残される場合もあり、かなり雑然としてゐる。殊に右の抄出によっていへば、「此代句ニ雑談アリ。上野ノ国赤城山麓ニ云々」（五オ）以下「柴門ノ送リヤウハ至極叮」（六オ）までは、いはば説話体で、

此の由ヲ尋ねバヤト思イ、山ニ登リ様々尋ねケルニ…ウス茶一服カスメテ出サレケリ。…米未レ味者トヤ聞カレケン三年過ぎテ彼ノ可レ被レ参由云ひ含メテ門送リシテ返サレケリ。…ガラ〳〵トクヅレケリ。（六ウ）

のごとく古風なケリ体が表れるのである。

また、方言、特に東国のそれと覚しきものが、「武蔵野ニ入るニ」（四オ）以下に著しくあらはれ、「武蔵野ニスマイスル入道」なる者の

武蔵野ニヲルベイ花ハエウアレド露ュッポけレバヲラレザリケリ（四オ―ウ）

といふ和歌にまで「ベイ・露ユッポい」等の語を見る。ベイは置(甘カ)いて、「…を帯びた情態」をあらはす「体言＋ポイ」といふ形容詞は、東国的で、「露ユッポケレ」はその已然形と見るべきものであらう。

日本言語地図には一ノ第三八図「塩味がうすい」の分布に、アマッポイ（静岡県北部）、水ッポイ（愛知県東北部、神奈川県南部、三浦半島、茨城県東部）があり、アマジョッパイ（甘塩）が、利根川流域（埼玉県）、神奈川県北部に散見するのと思ひ合はされる。第三九図「塩からい」のショッパイが関東一円、更に東北に跨って見られるのと共に、ポイ系語尾の形容詞として、珍しい古例となるのではないかと思ふ。（未完）

註1　小林芳規氏　平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究（七九八ページ）

2　高松政雄氏「べい」攷（国語国文三八ノ七・二八ページ）

**後記**　日本言語地図の解読には奥村三雄氏の協力を得た。